

Mansfield Park における “improvement” について

井上 麻美

Jane Austen (1775–1817) は作品の中で、フランス革命やナポレオン戦争といった歴史的な事件について直接言及することはあまりない。そのため彼女の作品世界は時代とは離れた所にあると見られることが多い。しかし、彼女が属した上層中産階級の風俗や慣習、価値観や行動様式など、いわゆるマナーズに関しては、作品の中に色濃く反映されている。

本論で扱う *Mansfield Park* (1814) において Austen は、当時の風潮を表していると思われる一つの対立軸を描いている。それは、主に中産階級で信奉されていた「福音主義の道徳観」と時の摂政皇太子で後の George 4 世のもとで栄華を誇った「摂政時代の流行」である。ヒロイン Fanny Price を「福音主義的道徳観」を象徴する人物として、そしてその対極にロンドンから来た青年で、後に Fanny に求婚する Henry Crawford を「摂政時代」を表す人物として描いていると見ることができる。ここでは、この Fanny と Henry の対立軸を念頭に置き、当時流行した「改良 (improvement)」について考察し、この作品における作者の意図を探ってみたい。

1

最初にこの作品の対立軸を明らかにしたい。*Mansfield Park* の作風は、他作品のそれとは微妙に色彩を異にする。この作品では Austen の他の作品に多く見られる機知や皮肉やユーモアといったものが影をひそめ、道徳色が濃く表れている。

まずヒロインが異例である。Fanny Price は、虚弱な体質と非常に内気という性質を持っていて、彼女には他作品のヒロインが持つ明朗さや活発さといったものが見られない。貧しい大家族の長女である彼女は、10歳の時に口減らしのために伯母の嫁ぎ先の *Mansfield Park* へと引き取られる。そこは規律と秩序を重んじる Sir Thomas Bertram を主とする屋敷で、彼には外部との交流を避ける傾向があった。そのため Park では活気や刺激がなく、娯楽に乏しかった。この禁欲

的な厳格さは、福音主義的なものを思わせる。

福音主義は、18世紀から19世紀にかけて主として中産階級を中心に広まった一つの宗教運動である。人々はフランス革命の原因の一つは宗教に対する無関心さにあると考え、それまでの態度を改め宗教の根本に立ち返るべきだと考えた。(オールティック 172)。その特徴は、教理や礼拝の形式よりも、むしろ人々の生き方に重点を置き、個人の祈りと聖書を読むことを信仰の第一義としたものであった。そして芝居、飲酒、舞踏、小説などの娯楽を過度に制限した。そのような福音主義的な厳格さを備え持つ父 Sir Thomas のもとで、子供たちは外の世界に刺激を求めるが、その中で次男 Edmund だけは違った。彼は牧師になることを天職と考え、真面目で分別があり、道徳を重んじる人物だった。Fanny は人格形成の過程で Edmund の影響を強く受けており、彼女にとって彼は「善良と偉大さの模範」(an example of every thing good and great *MP* 28) であった。彼はジェントリーの伝統的な価値観や道徳観を体現しており、それは Edmund の牧師という職業に対する考えに表れている。彼は牧師は「人間にとって最も重要なものの全て」(all that is of the first importance to mankind *MP* 66) を担っていると考え、それは「宗教と道徳、そしてそれらの影響力がもたらす態度振舞や礼儀作法」(religion and morals, and consequently of the manners which result from their influence 66) を守っているからだと言っている。この作品では Sir Thomas, Edmund, Fanny は、福音主義的なものを尊ぶタイプに属すると思われる。

Austen の作品では、ヒロインを取り巻く世界が外部からの侵入により一度崩壊の危機にさらされながらも再生されるという図式が見られる。ここでいう外部というのは、主に首都ロンドンのことで、この作品でも侵入者がロンドンからやって来る。Henry Crawford は Norfolk 州の Everingham に地所を所有しているが、いわゆる不在地主で、生活の拠点はロンドンにある。彼は異父姉 Mrs Grant を訪ねて妹の Mary と *Mansfield* 牧師館へやって来る。Roger Sales は彼を撰

政時代のダンディーの典型であると位置付けている(108)。この作品には他にも、彼のような摂政期の社交界の青年がいる。Bertram家の長男 Tom である。彼は気安い態度で気性は明るく、顔は広く話題は豊富、それに容姿もよく、体つきもがっしりしている青年で、自分は「お金を使って、楽しい思いをするためだけに生まれて来た」(born only for expense and enjoyment MP 15) のだと考えていた。従って、父 Sir Thomas や弟 Edmund がよしとする福音主義的な性質とは違って、ロンドンやリゾート地に入り浸り、競馬や狩猟などを楽しむ遊び好きで怠惰な人間であった。Sales によれば Tom は摂政期のスポーツマン (108) となる。

一方、Henry は Tom と違って容姿はよくないし、背は高くない。しかし、彼は優雅な物腰と優れた機知、洗練された身のこなしで、懇懇に振る舞い多くの女性を引きつける。彼はとても感じのいい紳士であるが、それはあくまでも表面的なもので、彼は「一カ所に住み続けたり、限られた人達とだけ付き合ったりすることが大嫌い」(MP 31) であり、彼にとって女性との交際は、ただ愛のプロセスを楽しむだけのゲームにすぎない。妹 Mary も兄について「彼ほど恐ろしい浮気者は考えられない」(He is the most horrible flirt that can be imagined. MP 32) と言っているほどであった。Henry は Bertram 姉妹をたちまち魅了してしまう。しかし、彼は摂政期のロンドンの社交界で振る舞っていたようにただ“flirtation”を楽しんでいるのにすぎない。彼にとっての愛は、一時のものなのである。それは「流行」の移ろいやすさにも通じるものがあると思われる。妹 Mary も洗練された活発な女性で機知に富んでいて、Fanny とは対照的な女性として描かれる。

Crawford 兄妹を象徴する摂政時代とは、1810年から1830年にかけてのこと、つまり当時の摂政皇太子で、後の George 4 世の「肥満した体と放蕩によって要約される時代」(オールティック 10) で、その特徴は派手で高価な衣装を好み、賭博、飲酒、競馬、猟、パーティー等に明け暮れる華やかな生活を好むといったものであった。女性を誘惑することが Henry の主な目的ならば、妹 Mary の目的はより高い地位と財産を得ることのできる相手との結婚にあった。この兄妹が Mansfield へやって来た時、Sir Thomas は西インド諸島アンティグアにある砂糖農園の財政再建のため、長期不在であった。摂政期のロンドンの華やかさと活気の中で育ったこの兄妹の登場は、福音主義的な禁欲

さを纏っていた Bertram 家に大きな刺激を与えることになる。

2

Sir Thomas 不在の中、Mansfield Park は、外部からの攻撃を受けることになる。その攻撃の1つとして地所 (estate) の改良 (improvement) を巡る話がある。Bertram 家長女 Maria の婚約者 Mr. Rushworth の友人 Mr. Smith は、自分の地所を当時流行の改良家 Humphry Repton に改良してもらった。改良後の Mr. Smith の屋敷は「地方の称賛的」(the admiration of all country MP 40) となったので、Mr. Rushworth も自分の地所の Sotherton Court を改良したいと思うようになる。彼は風采の上がない「愚鈍な青年」(a heavy young man MP 29) として作中で紹介される。彼には Tom や Henry のように社交界に入り浸るようなところはないが、作中では華やかさを好む摂政期の特徴がかいま見られる場面がある。それは Mansfield Park で素人芝居をする際、自分が着る衣装が、かなり派手であると知った Mr. Rushworth が、表向きは嫌そうにしながらも派手に着飾ることをいたく気に入り、周りの目に自分がどのように映るかで頭が一杯になってしまう場面である。Thomas Carlyle が *Sartor Resartus* (1834) でダンディについて述べている。つまりダンディとは「衣服着用をその業とし、職掌とし、生命とする人間であり、彼の魂、精神、財布、人物のあらゆる能力は、このただ一つの目的、すなわち、衣服を賢く、上手に着ることに英雄的に捧げている」(宇山 197) 人物たちのことで、Mr. Rushworth が衣装に気を使う点も、摂政期のダンディーの特質に当てはまるとされる。このように流行に対して決して無関心ではない彼は、改良にも興味を示す。“improvement”の概念とその流行について R. W. Chapman は、彼自身が編纂した *Mansfield Park* の“appendix”で、以下のように述べている。

Improvement *par excellence* meant that alteration and decoration of houses and grounds, on principles more or less ‘picturesque’, which from the age of Mr. Pope to the age of Henry Crawford was a chief amusement of cultivated leisure. (Chapman 557)

“improvement”は邸宅や庭園を“picturesque”の原理にそって改造し装飾を施すことを意味し、教養ある紳士階級の娯楽であり、“picturesque”は、「絵画の主題に適する」(村岡 118) という意味で、18世紀イギ

リスの美学理論では美や崇高の概念の一つに並べられていた。この当時は様々な物に改良を施すことが盛んであった。中でも “picturesque” について絵画の原理で自然の景観を観察し、多くの旅行記を執筆した William Gilpin の影響により、イギリス国内で景観を求めて旅をすることが流行したが、その “picturesque” の風景を自分たちの所有する庭にも造りたいという欲求から、特に屋敷や庭園の改良が大流行した。そして Repton 流改良が隆盛を極めた。Mr. Repton とは “Capability” Brown と呼ばれた造園家の弟子で、Austen の時代では有名であったが、同時に悪名も高かった。なぜなら景色の邪魔になるものは、たとえ年月を経た並木でも全て切り倒していくといった Brown 譲りの手法を用いたからである。*Mansfield Park* において “improvement” という言葉は、象徴的な意味を持っていると思われる。Mr. Smith の改良された地所を見た Mr. Rushworth は、自分の地所 Sotherton Court は「まるで陰鬱な牢獄」(quite a dismal old prison *MP* 39) のようであると言い、Mr. Smith の真似をして、改良したいと望む。しかし彼は自分では何も考えないで、Mrs Grant が “capital improver” (167) と評する Henry に改良の計画案を依頼する。Henry の計画は結局実行に移されなかったが、Mr. Rushworth が自分の地所を改良したいと考えたこと自体が、水谷三広が述べているように、「善き社会秩序を崩壊させるに足る危険を含む無分別」(208) なことであった。しかも依頼した相手である Henry が自分の地所 Everingham を3カ月足らずで改良し、短期間で終えたことについて「自分で自分の幸福を食べつくしてしまった」(*MP* 45) というような人物であった。常に何かをしているのが好きで変化を求める彼の姿勢は、摂政期の人々特有の傾向を示す。彼による改良は、古くから続いて来た伝統を破壊するという意味もはらむ。Rushworth 家のようなジェントリーの基盤は土地にある。エリザベス朝時代に建てられた由緒ある屋敷で、彼らの基盤でもある Sotherton Court の改良を、Mr. Rushworth と Maria はいとも簡単に Henry に委ねてしまおうとする。こうして Henry は “capital improver” として Mr. Rushworth と Maria を支配していくのである。この一件はまた、物語の最後で Henry と Maria が駆け落ちすること、つまり Mr. Rushworth と Maria の関係を破壊することを暗示する。

一方、Fanny は Sotherton Court の並木道を Repton 流に切り倒すという話を耳にして、“Cut down an avenue! What a pity! Does not it make you think of Cowper?

‘Ye fallen avenues, once more I mourn your fate unmerited.’” (*MP* 41) と William Cowper の *The Task* (1785) の中の言葉を口にして改良に反対の意を示す。そして “I should like to see Sotherton before it is cut down, to see the place as it is now, in its old state; . . .” (*MP* 41) と言う。このことから Fanny が、古いものを破壊する “improvement” を好まないことがわかる。

Gilpin と詩人 Cowper は Brown の手法に反対であった。“improvement” の流行に関して Austen は決して無関心ではなかったと思われる。彼女は Gilpin の作品に「幼い時から夢中になっていた」(蛭川 218) 上に、Cowper の詩を好んでいた。この二人の影響を受けた彼女は反 Brown であったと思われる、それは *Mansfield Park* での反 Repton にも繋がると考えられる。Mr. Rushworth と Maria の関係をかき回した Henry は、次に Edmund が聖職受任する予定の教区にある牧師館、Thornton Lacey の改良計画を提案する。Henry の案は、farm-yard を取り払い、鍛冶屋の仕事を見えなくするために樹を植え、家の向きと川の流れを変えろといったものであった。Alistair Duckworth は、この Henry の改良案は伝統への拒絶であるとみなして “His plans to ‘clear away,’ ‘plant up,’ and ‘shut out,’ features of the landscape are to be read as a rejection of a traditional shape of reality. (52)” と言っている。Henry の計画を聞いた Edmund は、華美にすることを避け、費用をかけることなく紳士らしい住居にするつもりであると次のように言う。

“I must be satisfied with rather less ornament and beauty. I think the house and premises may be made comfortable, and given the air of a gentleman’s residence without any very heavy expense, . . .” (*MP* 166)

これに対し Henry は、賢明な改良を施すことで、単なる紳士の住居から教育と趣味と、現代的なマナーを備えた家柄のいい紳士の住まいになり、その上街道を旅する人たちみんなが、持ち主はこの教区の大地主だと思おうだろうと以下のように言う。

“From being the mere gentleman’s residence, it becomes, by judicious improvement, the residence of a man of education, taste, modern manners, good connections. All this may be stamped on it; and that house receive such an air as to make its owner be set down as the great land-holder of the parish, by every creature traveling the road; . . .” (*MP* 167)

このことから Henry が、表面的なことに気を使

い、他人からどう見られるかを意識していることがわかる。それは華美に飾りたてることを好んだ摂政期の特徴に通じると思われる。EdmundはHenryとは全くタイプが違い、またMr. Rushworthのように摂政期の流行に感化されていない。Edmundは改良すること自体には反対していないがその方法を問題にする。HenryがMr. Repton流の改良を好むのに対し、Edmundが好む改良は、彼が“I would rather have an inferior degree of beauty, of my own choice, and acquired progressively.”(MP 42)と言っているように、時間をかけて自分の手で改良を施し、その過程を楽しみたいというものであった。Sotherton CourtとThornton Laceyの改良のどちらに対しても反対するのは、EdmundとFannyだけである。このことは彼らの保守的な傾向と福音主義のいう禁欲的な一面を表していると考えられる。加えてこの場面には、福音主義をよしとするEdmundの意志がはっきりと打ち出されていると思われる。HenryがThornton Laceyを別荘のようなものと考えていることに対して、Edmundが教区に定住する意志があるのを承知しているSir Thomasは次のように述べる。

“... a parish has wants and claims which can be known only by a clergyman constantly resident, and which no proxy can be capable of satisfying to the same extent. Edmund might, in the common phrase, do the duty of Thornton, that is, he might read prayers and preach, without giving up Mansfield Park; he might ride over, every Sunday, to a house nominally inhabited, and go through divine service; he might be the clergyman of Thornton Lacey every seventh day, for three or four hours, if that would content him. But it will not. He knows that human nature needs more lessons than a weekly sermon can convey, and that if he does not live among his parishioners and prove himself by constant attention their well-wisher and friend, he does very little either for their good or his own.” (MP 170)

Sir Thomasはここで聖職者の果たすべき義務について述べている。つまり人間性には定期的に説教が伝わるもの以上の様々な教えが必要で、教区民の中に住むことで自分が教区民のためを思う味方なのだを実証しなければ何にもならないのであって、その義務は在住の聖職者が負うべきものであると言っているのである。彼の聖職観は、Edmundの是とするものである。当時は複数の教区を持つ不在牧師が増えつつあった。

福音主義は複数の教区を持つことは、権利の乱用で、聖職者が教区民のモラルに与える影響は大きいとみなしていた。そして議会も、聖職者に教区に住むことを課した(Roberts 136)。Edmundの聖職観は、不在地主であるHenryや“A clergyman is nothing.”(MP 66)と言うMaryの考えとは明らかな対照をなす。

3

“improvement”という言葉が、この作品において象徴的な意味を持つと先に述べた。“capital improver”であるHenryは、「伝統を破壊する者」としての役割を担っている。Henryの言う“improvement”が意味するものについて、Tonny Tannerは以下のように記している。

Henry Crawford is a great and enthusiastic ‘improver’—and not only of gardens. He tempts Maria with some seductive hints as to how he might improve the uninviting prospects of her life as Mrs Rushworth. He is a man who, for his own amusement, likes to tamper—with other people’s estates, with other people’s wives. (Tanner 459)

Henryは常に変化を求め、自分が楽しむために行動しているに過ぎない。しかし、その変化への衝動は、「潜在的な危険と破壊」(potentially dangerous and destructive 459)を示す。一方、Edmundは大きく変化させる改良には反対であり、少しずつ時間をかけて自分の手で改良を施していきたいと考えている。Austenがよしとする“improvement”について水谷三広は、「一族の古くからの荘園領主館に体现された生活の場を自ら受け継ぐ覚悟を持つ当主が、その計画と監督の下で、この生活の形態を次代に伝えるに足るかぎりの適切な修正を加える行為」(208)であると言っている。つまりMr. Rushworthのように改良の計画について自分では何も考えず、他人まかせにすることではない。これはEdmundの考えと共通すると思われる。

1789年にフランス革命が勃発すると、それにつられるようにイギリスでも立て続けに暴動が起こった。そんな中、福音主義運動は、フランスで起こった動乱の主な原因は宗教への無関心にあるとの考えに基づき、暴動以前の根本主義的な宗教へと立ち返えることを目指した。一方で、当時流行したRepton流改良は、伝統ある屋敷に手を加え、年月を経た並木を切り取って現代風に作り替えるといったものであった。伝統崩壊を起こしたフランス革命に対する記憶の反動か

ら、その行為は「伝統的価値観に対する脅威、伝統の破壊」(鈴木 68)を意味するものとして受け取られるようになる。伝統を無視し、大きな変化をもたらす Mr. Repton 流の改良を Henry が支持するのに対し、Edmund は、改良しても最低限に留め伝統あるものを守っていきたいと考える。Austen はこの改良の流行に決して無関心ではなかった。しかし、流行はあくまで一時的なものである。その過剰な変化に躍らされるのが、いかに危険であるかを示したかったのではないだろうか。

TEXT

Austen Jane, *Mansfield Park*. ed. Claudia L. Johnson, Princeton University, 1998.

REFERENCES

Austen, Jane. Appendix to *Mansfield Park*. ed. R. W. Chapman, Oxford University Press, Oxford, 1978.
 ——. *Mansfield Park*. ed. Tonny Tanner, Penguin Books, 1966.
 Duckworth, Alistair M. *The Improvement of the Estate: A*

Study of Jane Austen's Novels. Battimore and London: Johns Hopkins UP, 1971.
 Roberts, Warren. *Jane Austen and French Revolution*. 1979. London and Atlantic Highlands, NJ: Athlone, 1995.
 Sales, Roger. *Jane Austen and Representations of Regency England*. London and New York: Routledge, 1994.
 リチャード・D・オールティック『ヴィクトリア朝の人と思想』音羽書房, 1998。
 宇山直亮『世界大思想全集 26』河出書房新社, 昭和 34 年。
 大島一彦『ジェイン・オースティン—「世界一平凡な大作家」の肖像』中央公論社, 1997。
 鈴木美津子『ジェイン・オースティンとその時代』成美堂, 1995。
 惣谷美智子『ジェイン・オースティン研究—オースティンと言葉の共謀者達』旺史社, 1993。
 都留信夫『イギリス近代小説の誕生—十八世紀とジェイン・オースティン』ミネルヴァ書房, 1995。
 蛭川久康『講座・イギリス文学作品論 3 ジェイン・オースティン』英潮社新社, 1977。
 水谷三広『英国貴族と近代 持続する統治 1640-1880』東京大学出版会, 1987。
 村岡 勇『英文学—詩と自然』英宝社, 昭和 49 年。